

Title	バンジャマン・コンスタン 『征服の精神と篡奪：ヨーロッパ文明との関わりにおいて』 (九)
Sub Title	De l'esprit de conquête et de l'usurpation dans leurs rapports avec la civilisation européenne (traduction) (9)
Author	堤林, 剣(Tsutsumibayashi, Ken) 堤林, 恵(Tsutsumibayashi, Megumi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.7 (2009. 7) ,p.101- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090728-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

バンジャマン・コンスタン『征服の精神と篡奪』 ——ヨーロッパ文明との関わりにおいて』(九)

堤 林 劍
堤 林 惠 訳

七 第二部 篡奪について

第一七章 以上の考察における専制政治に関する 帰結

専制政治のように一切の利害を自分に敵対させ結果させることのない正当な政府においてさえ、非合法的な手段はその存続に有利に働くどころかこれを危険に晒し脅かすとするれば、こうした方策によって構成されている専制政治が自らのうちに安定性の萌芽をかけらも宿しえないことは明らかである。専制は先の見通しもないままにその日その日を過している。斧を手に無実の人間にも犯罪者にも襲い掛かり、自分が巻き込みおだてて富を与えた共犯者に怯えな

がら、恣意的な権力行使によって自分を維持しようとする。しかしある日、別の専制がこの恣意的手段を掌握し元の政府の手先を操ってこれを覆す*。

*ナポレオンの支配における最初の四年間を特徴づけた主要な恣意的行為の継起を考察することは、非常に興味深い。それはサン・クルーの篡奪に始まった——ヨーロッパがこれを擁護したのは、この篡奪を必然とみなし、しかも自分たちの手でいくぶん鎮静化したことを誇りに思っているあの内紛が合憲的な権力の行使のみによって終息したのでなければ、決して到来しなかった事態だと考えたからである。まずはこの篡奪直後の様子をご覧いただきたい。裁判もなしに三、四十人もの市民が国外追放を受けた。続いてまた新たに百三十人が追放され、アフリカの地へと送られそこで果てた。それから軍事委員会を存続させたまま特別法廷

が設立され、次に護民院の抹殺、代表制に属するものの破壊が続いた。そしてモローの追放、ダンギアン公爵の殺害、ビシユグリユの暗殺、等々。私が挙げたのは無数のもののほんの一部に過ぎない。銘記していただきたいのは、これが彼の支配における最も平和な時期と考えられること、そして合法性の外観を纏うのが政府にとつては最も喫緊の利益だったということである。だが寡奪と専制政治はその本質によつてこうした手段の採用を余儀なくされるのだ。というのも、この明白な利益でさえ、極めて狡猾で平静な寡奪者を手段に過ぎぬはずの苛烈さから守ることができないからである。彼はたぶん精神的な人物であつた、もし心の卑しい面にまつわる認識を精神と呼ぶならば。善悪には無関心で、その独特の公正さゆえに、より確実なものとして前者を選ぶこともできたはずの人物——だが結局は、暴政のあらゆる原理を研究し、巧妙さの証としてある種の節度を誇示することに自己愛の満足を覚える、そうした人物であつたのだ。

不満を抱く世論を血の海に窒息させること、それはある種の政治の暗流には好適の格率となる。だが世論が消え失せることはない——血は流れるだろう、だが世論は生き延びて再び戦いを挑み、そして勝利する。世論は抑圧されるほど激越なものとなり、人々が呼吸する空気とともに精神へと浸透する。そうして各人に馴染みの感情となり強固な

信念となる。陰謀を企てるために顔を寄せ合うことはせずとも、出逢いがすべての者を協力させるのだ。

国民の外観がどれほど卑しめられて見えようと高潔な感情は常にある孤独な魂のうちに隠れており、そこで憤り、沈黙のなかで高ぶつていくのである。集会堂の円天井には怒りに満ちた演説が響き渡るかもしれない。宮殿で囁かれるのは人類を貶める言辞だ。民衆にへつらう者は彼らに憐憫への反感を掻き立て、暴君に追従を並べ立てる人々はその勇気を謳い上げるかもしれない。だがいかなる時代においても、専制政治⁽¹⁾が望むような仕方で全人類が天に見捨てられることはないだろう。一人の人間の名においてであれ全体の名の下であれ、およそ抑圧というものに対する憎悪は、時代を超えて伝えられていくのだ。未来はこの崇高なる大義を裏切らぬであろう。正義を熱愛し、弱い者の護り手たることを望む人間は常に存在し続ける。自然がこの継承を望んだのだ。いまだかつてこの繋がりが断たれたことはない。これからも決して断たれないだろう。こうした人々は必ずこの高潔な衝動に従うだろう。多くの者が苦しみ、多くの者が命を落とすかもしれない。それでも大地は、彼らの灰が混ざり合うこの大地は、その灰によつて呼び覚まされ、いつか臉をうつすらと開き始めることだろう。

とりわけ我々の文明の時代において專
 第一八章 制政治を不可能なものとしている諸要
 因について

これまで読み進んできたのは一般的な性質の議論であり、文明化されたあらゆる国民、あらゆる時代に適用されうるものといえよう。だが近代文明の状況に特有ないくつかの要因が、我々の時代においては専制政治に新たな障害を設けている。

この要因は大体において、好戦的な傾向に平和を好む志向を置き換えたもの、古代人の自由を近代人のもとに移植するのを不可能にしたものと重なる。

自らの安寧と快楽とに揺るぎがたく結び付けられた人類は、これらを脅かそうと望むあらゆる権威に対し、個人としても集団としても反発を示すだろう。私がすでに述べたように、政治的自由に対する情熱においてはるかに古代人たちに劣っているがゆえに、我々は形式に存するような保障を等閑視しかねない。だが個人的自由にはよりいっそうの強い愛着を抱いているため、その基盤を攻撃されれば直ちにあらゆる手段を用いてこれを守り抜く、ということにもなる。そしてまた、我々は古代人たちの持たなかつた防

衛の手段を手に行っているのである。

先に私は、商業が我々の存在に対する恣意的支配の作用をこれまでになく抑圧的なものとしたこと、そしてその理由はより多様化した我々の事業展開を掌握するため恣意的支配もその範囲を拡大せざるをえない点にあることを示した。しかし商業は同時に、恣意的支配の働きから逃れることも容易にする。それは商業が所有の性質を変容させ、ほとんど把握しがたいものとするからである。

商業は所有に新たな性質を与える——流通である。流通なしには、所有もただの用益物権に過ぎない。政治的権威が常に用益物権に対する影響力を有しているのは、享受を奪う力を具えているためだ。だが流通は、この社会的な力の作用のうえに不可視にして不落の障壁を配置するのである。

商業の影響はさらに広範に及ぶ。それは個人を解放するだけではなく、信用財 (credit) を創出することによって政治的権威の依存性を高めもする。

あるフランス人の著作家が述べている——金銭は専制政治が手にする最も危険な武器であるが、同時にその最も強力なブレーキでもあると。信用が従うのは世論に対してである。権力は役に立たない。金銭は隠れ、あるいは逃避す

る。国家の一切の活動は停止される。信用は古代人たちのあいだではこれほどの影響力を持っていなかった。彼らの政府の力が諸個人に勝っていたのである。だが我々の時代においては、諸個人のほうが政治権力よりも強力である。富は力であり、時を問わずより容易に手に入り、あらゆる利害に対してより広く適用が可能で、したがってはるかに現実的かつはるかに多くの人間を従わせることができる。政治権力は脅威を与え、富は報酬を与える。人々は権力を欺いてその手を逃れるが、富の恩恵を蒙るためには富に仕えなくてはならない。勝利は後者の手に握られている。

同じ一連の要因によって、個人の存在はさほど政治的存在のうちに包含されなくなった。個人は自分たちの財貨を遠くへ移し、それと一緒に私的生活のすべての快樂をも運び去る。商業は諸国を結びつけ、彼らに多少とも似通った習俗と慣習とを与えた。支配者たちは敵国士かもしれないが、国民は同胞となる。古代人たちにとっては苦悶を意味した亡命も近代人には何とすることもない。苦痛を引き起こすどころか快適なことさえ珍しくないのだ。^{*} 専制政治に残された窮余の策は亡命を禁止することだが、禁止だけでは妨害にいたらない。出国を禁じられた国々ほど人間が喜んで去るものはないのである。したがって亡命した人物

を追跡し、近隣にはじまって遠隔の諸国に至るまで彼を追い払うよう強制せねばならない。専制政治はこのようにして、隷属の体制、征服と普遍君主政の体制へと逆戻りする。ご覧いただいたごとく、それはある不可能性を別の不可能で修復しようと望むことなのだ。

* キケロが「我々は祖国のために死ぬことができねばならぬ、祖国のためにすべてを捧げなくてはならぬ。およそ我々のものは一切が祖国に属する、ありとあるものをその犠牲に差し出さねばならぬのだ」(pro qua patria mori, et cui nos totos dedere, et in qua nostra omnia ponere, et quasi consecrare debemus) [「法律」II, 2, 5] と語った時、その祖国にはおよそ人間の手にしうる最も貴重なものすべてが含まれていた。祖国を失うこと、それは妻と子を、友を、一切の愛情を喪失することであり、あらゆる結びつきと社会における喜びのほとんどを奪われることであった。愛国心の時代は過ぎ去った。我々が祖国のうちに愛するのには、自由におけるのと同様、財産の所有や安全、活動と休息の機会、栄光への可能性、数え切れぬ種類の幸福に至る道である。祖国という言葉が我々の思考に呼び起こすのは、ある個別な国の地形学的な観念というよりもむしろ、こうした善の集合体である。誰かの手でそれが奪い去られるなら、我々は他の場所にそれを探しにいくだろう。

ここで私が主張したことは、まさに我々の眼の前で立証

されたばかりである。フランスの専制政治はあらゆる土地から土地へと自由を追い回し続けた。そしてしばらくの間は、自分の支配が行き渡った全領土でこれを押し殺し消滅させるのに成功した。しかし自由は常に地方から地方へと逃げ移り、それを遠い僻地まで追跡せざるをえなかった専制は、終にそこに自らの破滅を見出したのであった。地の果てでは人類の才智が彼を待ち受けていた——その帰還をより恥ずべきものとし、懲罰をより忘れがたきものとするために*。

*私は〔護民院の〕同胞たちの一人が示した勇氣と知性とを正当に評価できることを喜ばしく思う。彼は数年前に暴政の支配下において、ここで私が発展させたような真理を記し出版したのである。ただしそれは私の用いた、当時では公刊しえなかつたような根拠とは異なる種類の証拠に立脚していた。「文明の現状においては、そして我々の暮らす商業の体制においては、すべての公権力が制約を受けざるをえず、絶対的な権力は存続しえなご」。GANILH, *Hist. du revenu public*, I, 419 [Charles Ganilh, *Essai politique sur le revenu public des peuples de l'antiquité, du moyen âge, des siècles modernes, et spécialement de la France et de l'Angleterre, depuis le milieu du XVe siècle jusqu'au XIXe*, Paris: Gignet et Michaud, 1806, 2 vol.]。

第十九章

専制そのものが今日では存続不可能であるがゆえに、専制政治によって維持されえない篡奪にはいかなる継続の可能性も存在せぬこと

専制政治が今日では不可能とされるなら、篡奪を専制によって維持しようとするのは、いずれ倒れずにはすまないものを折れんばかりの添え木で支えるようなものである。

専制を欲すれば正当な政府は自らを危険な状態に陥れることとなる。だがそれでもこの政府には習慣という助勢があるのだ。旧く神聖なすべての権力に共和政か君主政かを問わず伴侶として付き従っていたこの崇拜の念、そこから解放されるためにいつたいどれほどの時間を長期議会が必要としたかをお考えいただきたい。はたして篡奪者の支配下に存在する諸団体は、その軛を打ち砕くのにこれと同じ道徳上の障碍を、同じ良心の躊躇いを感じるだろうか？

こうした団体が奴隷に身をやつしても益はない。彼らは屈従すればするほど、情勢の変化によって解放された暁にはますますその狂暴さを露にする。長かつた隷属の代価を要求するのだ。かつてアグリッピナの死を祝い、母を殺害したネロを称賛するため国を挙げての祭事採決した元老院

議員たちは、のちに鞭打ちとテヴェレへの墜死刑を彼に宣告することとなるだろう。

正当な政府が専制へと転じる際に遭遇する困難は、その正当性と関連している。これらの困難は成功を妨げるが、しかし政府の試みが自らに引き寄せる危機を減少させもする。篡奪はこれほどに整然とした抵抗を蒙らない。成功は一時的であるにせよ、その時点ではより完全であるといえよう。だが広がった抵抗の波はいっそう無秩序なものとなる——混沌に混沌が対峙するのだ。

正当な政府が権力の濫用を試した後に再び穩健さと正義の実践に立ち戻るなら、そのことですべての人から感謝されよう。政府は馴染みの地点へと引き返し、そうして呼び覚ます記憶で人々の精神を安らかにする。自らの計画を放棄した篡奪者は無能さのほか何も表さない。彼が歩みを止めた限界は、彼の目指していた終着点と同じくらい虚しいものである。嫌悪の度合いは変わらず、ただいっそうの軽蔑を受けるであらう。

そのため、一切の利益に反発され蜂起されるがゆえに篡奪は専制政治なしに存続しえず、また専制政治が存続しえぬがゆえに、専制を伴ったとしてもやはり存続できないのだ。したがって篡奪の維持は不可能である。

おそらくフランスが我々の前に晒す光景は、いかなる希望をも打ち砕くかに思えよう。そこには勝ち誇り、あらゆる恐怖の記憶で身を固め、あらゆる罪深い理論を継承し、かつて為されたあらゆる行いが自分を正当化すると思ひ込み、過去のありとある過ちと犯罪とによって力を得、人間への蔑視と理性への軽蔑を誇示する——そうした篡奪の姿がある。周囲には一切の卑しい欲望と一切の狭量な打算、洗練を装った墮落が寄り集まり、革命の暴力のさなかに恐るべき姿を見せつけた情念は、異なった形態のものにも再び生み落とされる。恐怖と虚栄は以前、党派的精神をもじりその最も根深い怒りをかたどってみせた。現在では、卑屈この上ない服従さえ顔色を失うほどの度外れな表現に及んでいる。また自己愛が何にもまして強かに生き延び、卑劣さにおいても新たな成功を収めるかたわら、怯えはそこに避難所を探し求める。強欲が大手を振って罷り通り、自らの汚辱を暴政に保証として提供する。詭弁はあらゆる観念を曖昧にし自分を論破しようとする声を叛徒と名指しながら、暴君の膝元にいそいそと馳せ参じ、熱狂で彼を驚かせ彼に先んじて喚声をあげる。才気も一働きしようと思いつけてくる。良心と切り離された才気は何にもまさってさもししい道具となるのだ。あらゆる意見の背教者たちが、以

前の教説から邪な手段への習癖だけを保ったまま、群をなして押し寄せる。狡猾な変節漢は悪徳の伝統を背負って昨日の隆盛から今日の繁栄へと人知れず忍び込む。宗教は政治的權威の拡声器に、理屈は権力へのおべっかになる。あらゆる世代にはびこる偏見、あらゆる国に広まる不正義が新たな社会秩序の資材として掻き集められる。人々は過去の世紀に逆戻りし、遠い国々を遍歴し、そうして無数の描線によっておよそ模範として与えうるかぎりの完全な服従を描き出そうとする。不名誉きわまりない文句が口から口へと飛び移るが、実際の源泉から発せられるわけもなく、そこにはひとかけらの確信も含まれてはいない。煩わしく、無益な、そして馬鹿げた喧騒——真理にも正義にも、汚れない無傷の表現をゆるす余地などありはしないのだ。

このような状況は、混沌を極めた革命に比してなお悲惨であるといえよう。ローマの先導的な護民官に反感を抱くことも時にはあるだろう、しかし皇帝たちの支配下にある元老院に向けられた軽蔑を思えば息苦しさを感じる。チャールズ一世の敵を苛酷で罪深い人間とみなすこともできようが、クロムウェルの手先のことを考えれば底知れぬ嫌悪が我々を捉える。

社会の下層の人々が罪に手を染めようと、教養ある階級

は無傷のままである。不幸の伝染から彼らの身は守られている。そして遅かれ早かれ事態の成行きが権力をその手に返す以上、彼らは墮落というより迷走した世論をたやすく連れ戻すだろう。だがこの階級そのものがかつての原理を放棄し、慣れ親しんだ慎みをかなぐり捨てて自ら忌まわしい实例を示すなら、一体いかなる希望が残ろう？ 栄光の萌芽、美德の泉源をどこに見出そう？ 一切は汚濁、血、そして粉塵のみだ。

あらゆる時代において、人間性に与する人々に定められた運命の何と悲惨なことか！ 無視され、疑われ、周りにいるのは勇氣も公平無私な信念も本気にすることのできぬ人間ばかり、抑圧者たちが最も力ある立場にあれば憤慨に駆られ、また彼らが犠牲者となれば憐れみの情につきまとうれることの繰り返しである。そうして彼らは、ときに狂暴ときに頹廢的な時代のさなかにあつて、あらゆる党派から標的と狙われ孤独に地上を彷徨ってきたのだった。

にもかかわらず、人類の希望は彼らのうちに宿っている。暴君のこぞつて書き改める詭弁一切に対抗し、諸世代が不滅の文字のうちに託したかの偉大な書簡が我々の手にあるのは、まさに彼らのおかげなのである。この手紙のゆえに、ソクラテスは無知蒙昧な民衆の迫害を超えて永らえ、キケ

口は忌まわしきオクタヴィアヌスに追放を命じられながらも完全に滅び去ることはない。彼らに続く人々が勇氣を失わぬことを！ 後継者たちが新たな声とともに立ち上がりんことを！ 許しを乞わねばならぬことなど、彼らには何一つない。償いも前言撤回も必要ない。純粹な誓れという宝を無疵のまま手にしているのだ。彼らが高潔な觀念に対する愛の表明に踏みださんことを！ この諸觀念がいつか彼らのうちに告発者の姿を見ることがありえない。專制政治が自ら無益と判断した偽善を輕蔑し、旗幟鮮明たらんと傲慢に古来より名高いその軍旗を掲げるような時代にも報いが無いわけではない。同盟者の殘虐行為に顔を赤らめるよりは、敵の圧制に苦しむほうがどれだけ望ましいことか！ そうすれば、地上の徳高き存在すべてから賛意をもつて迎えられるだろう。全世界に見守られるなかで、あらゆる善良な人々の望みに支えられて、高潔な大義を掲げることができなのだ。

國民が眞の自由から身を退くことなど決してありえない。彼らが自由を手放したと言うのは、すなわち彼らは屈辱と苦悶と貧窮、そして悲惨を愛すると述べるのである。愛着の対象から引き剥がされても仕事を妨害されても、財産を奪われても、意見や最も内奥の思想において苦惱を強い

られても、監獄へ、そして死刑台へと引き摺られようとも、彼らは一切痛痒を感じないのだと主張することである。なぜなら、自由の保証が打ち立てられるのはこうした事柄に抗してのことであり、人々が自由に訴えるのはこのような災禍から身を守るためにほかならないのだから。これこそまさに國民が不安を抱き、呪い、忌避する災厄なのだ。どこで、どのような名称のもとで遭遇しようと、彼らはこれらの災いに怯えたじろぎ、後退りする。抑圧者が自由と呼ぶものうちに人々が嫌い憎むもの——それは奴隸制にほかならない。今日、隸属はその眞の名において、眞の形式において、國民の前に姿を現した。だからといって嫌悪が薄れるというものもあるまい？

眞理の伝道者たちよ、道が鎖されたならば熱意を募らせ、さらなる努力をもつて励むのだ。光明のすみずみまで照り渡らんことを！ 曇りに蔽われようと再び姿を現し、遠く追ひ遣られても再び戻り来たらんことを！ 再生し、増え広がり、変容を遂げよ！ 光は迫害のごとく疲れを知らぬであろう。ある人々は勇氣を抱いて歩み、他の人々は巧みに忍び入るだろう。眞理は広まり、浸透し、時に響き渡り、時に小声で囁かれ続けることだろう。すべての理性が集結し、すべての希望が蘇り、誰もが働き、誰もが奉仕し、誰

もが準備を調える——かく、あらんことを。

暴政、不道徳、不正義はあまりに本性に反するがゆえに、この奈落から人間を引き戻すにはたった一つの努力、勇敢な声一つで事足りるのだ。道徳の忘却から生じた不幸を知れば、彼は道徳のもとに戻る。自由の忘却から生じた不幸を知れば、彼は自由のもとに戻る。いかなる国家の大義も絶望するには至らない。内乱の時期、イングランドは非道な行いの例をいくつも示した。その錯乱を脱したのもただ隷属に飛び込むためかと思われた。だが、にもかかわらずイングランドは賢明にして高徳、自由なる諸国民の列にその席を取り戻したのであり、今日においてその姿を眼にした我々は、そこに諸民族の規範と希望とを仰ぎ見たのであった。

本書の印刷は先の十一月に始められたのだが、その間に息をつくまもなく継起したさまざまな事件が、ここで私の確立したかった真理をかなり明確な形で証明してくれた。そのようなわけで、当初はできるかぎり一般的な原理のみに終始しようと望んでいたのだが、結局そうして与えられた実例を援用せずにはいられなくなりました。

この十二年というものは自分を世界を征服する運命にあるのだと主張し続けていた人物が、ついに自分の非を認めるに及んだ。彼の演説、彼の働きかけ、行いの一つひとつが、私の纏め上げることできたものすべてを超えて、征服の精神に対抗する議論の勝利を高らかに謳っている。同時に、彼の行為は同様の逆境に晒された正当な君主たちのそれとは大分異なっており、私が君主政や共和政から篡奪を區別しつつ際立たせようとした相違に、新たな区別を付け加えたのだった。カンブレ同盟期のヴェネツィア、あるいはルイ十四世の脅威に直面したオランダを思い浮かべていただきたい。国民の何という信頼感、為政者たちの何という落ち着きと豪胆！ それもみな政府が正当性を具えていたがゆえなのだ。老年を迎えたルイ十四世はどうであったか。彼は全ヨーロッパを敵として戦わねばならないのに、老衰に蝕まれ力を失っていた。彼の傲慢も運命に讓歩する必要を認めた。それでも彼の言葉は威厳に満ち溢れていた。数々の危機にもかかわらず、それ以上の讓歩を許さない一線を定めた。不運のさなかにおけるその気高さは、ほとんど彼に盛運が犯させた誤謬の弁護とさえなりえた。そして彼の過ちが罰せられたのと等しく、その魂の偉大さもまた報われることとなった。名誉ある平和が彼の王座と彼の国

民を救ったのである。今日においてはプロイセンの国王が諸邦の一部を失い、彼は不均衡な戦争を続けることができな^い。彼は運命を甘受したが、敗北にまみれながらも人間としての毅然とした態度と王たる風格を失わなかった。ヨーロッパは彼を讃え、国民はこの王を気の毒に思い、深く愛した。いたるところから密かな祈りが寄せられ彼の祈願と結びついた。そして彼が号令を掛けたなら、高潔なる国民は彼の屈辱を雪ぐために馳せ参じたのである。さてそれとは異なる例、諸国民の歴史においてひととき重大な、かつ特異な例について我々は何と言うことができよう？ それは敵に占領された国境付近の諸州ではなく、広大な帝国の中心部へと踏み入った異境の人間であった。失意の叫びが一声でも耳に届くだろうか？ 弱気の振舞を一つでも眼にすることがあろうか？ 侵略者は前進し、誰もが沈黙する。彼は脅迫するが、屈する者は誰もいない。彼は首都の塔に自分の軍旗を樹てる、そして焼け落ちて灰となったこの都が彼の手にする答えとなる。⁽²⁾

彼はそれとは逆に、自分の領地が侵略されるのにさえ先んじて、隠し偽ることのできない困惑に見舞われていた。国境に到達されるかどうかという時に自分の征服した国々を遠く打ち遣った。兄弟の一人が王位を放棄するよう求め、

もう一人の国外退去を承認した。人々が望まぬうちから、彼はすべてを手放すと自ら宣言したのである。

この違いは一体どこから生じるのか？ たとえ敗北しようとも国王たちが彼らの威厳を捨て去ることはないのに対して、何故地上の征服者は最初の挫折で歩みを止めてしまうのか？ それは、王たちが自分の王座の基礎は臣民の心の中に存することを熟知していたからである。しかし篡奪者は非正当的な玉座のうえに、まるで孤立したピラミッドに腰掛けるごとく怯えながら居座っているのだ。いかなる同意も彼を支えはしない。彼は一切を粉塵に帰し、この流砂は荒れ狂う風が彼を襲うにまかせろ。彼は言う、自分の家族の叫び声とその心を引き裂くと。ではロシアの地で傷口と寒さと餓えという三重の苦しみに倒れた人々はこの家族の者ではなかったのか？ だが、彼らは指揮官に見捨てられて死んでいったというのに、その指揮官自身は身の安全を信じきっていたのである。今ようやく彼も危険を分かち合い、不意にこみ上げてきたその感覚を味わっているのだ。

恐怖は悪しき助言者である、とりわけ良心の存在しない場合においては。不運のなかでも、幸運な時期と同様、手立ては道徳のうちにはか存しない。道徳が支配しないとこ

ろでは幸運も狂気に惑い、不運は墮落に迷い込む。

嵐の只中であつて前代未聞な盲目的恐怖、突然の怯懦が勇敢な国民に及ぼさずにおかぬ作用とは、一体どのようなものであろう？ 多くの行過ぎに対し正当な裁きを受けた革命家たちは少なくとも、自分たちの人生がその大義と深く結びついていること、そして抵抗する力を持たないのならヨーロッパを挑発すべきではないことを感じ取つていたのだから。確かに、フランスは十二年前から重く苛酷な暴政の軛に呻吟してきた。最も神聖な権利が侵害され、一切の自由は蹂躪された。だが、そこにはある種の栄光が存在した。国民的誇りは（誤つてではあるが）一人の不屈の指導者によつてのみ抑圧されることに報いを見出した。果たして今日、何が残されているだろうか？ もはや威信もなく勝利もなく、手足をもがれた帝国、世界中からの憎悪、莊厳さを失い武器飾を破壊された王座、その王座は自らを打建てるために喉を掻き切られたタンギアン公爵とピシユグリユのさまよう影のほか取り巻きとて持たないのだ！ 君主政の誇り高き擁護者たちよ、あなたがたは聖王ルイのフランス国王旗が罪に血塗られ勝利を奪われた軍旗によつて置き換えられることに耐えられようか？ 共和政を望む人々よ、あなたがたの期待を裏切り、あなたがたの内部抗

争をその葉陰で鎮めた月桂樹を萎れさせ、あなたがたの過ちにまで賛辞を向けさせた支配者について何か仰ることがおありだろうか？

(1) 初版では「専制政治」が「恣意的支配」(arbitraire)となつている。

(2) この箇所はナポレオンのロシア遠征への言及である。